

目次

1. アンケート概要	2頁
(1) 目的		
(2) 対象者		
(3) 実施時期・形態		
(4) アンケート内容		
(5) 実施機関		
(6) 分析機関		
2. 分析の総括	2頁
3. アンケートの結果と分析	3頁
(1) 所属専修・コース名		
(2) 入学前の状況		
(3) 入学動機		
(4) 教育内容の質・量等		
(5) 教育環境		
(6) 大学教員		
(7) 学生生活		
(8) 本学で学んだことの成果		
(9) 卒業後・修了後の進路予定		

※この報告書は、カラーユニバーサルデザインに配慮しています。

概要

(1)目的	本学の教育の状況についてデマンド・サイドの意見を把握することにより、教育の質の維持・向上及び教育研究体制の一層の充実を図ることを目的とする。													
(2)対象者	<p>学士 課程：回答者76人／対象者117人(回答率65.0%)</p> <p>修士 課程：回答者37人／対象者 91人(回答率40.7%)</p> <p>専門職学位課程：回答者51人／対象者 95人(回答率53.7%)</p>	<table border="1"> <caption>回答者数と無回答者数の比較</caption> <thead> <tr> <th>対象者</th> <th>回答者数</th> <th>無回答者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>学士</td> <td>76</td> <td>41</td> </tr> <tr> <td>修士</td> <td>37</td> <td>54</td> </tr> <tr> <td>専門職学位課程</td> <td>51</td> <td>44</td> </tr> </tbody> </table>	対象者	回答者数	無回答者数	学士	76	41	修士	37	54	専門職学位課程	51	44
対象者	回答者数	無回答者数												
学士	76	41												
修士	37	54												
専門職学位課程	51	44												
(3)実施時期・形態	令和4年度1月～3月中に対象者にWebアンケートにより実施した。													
(4)アンケート内容	<p>①本学への入学動機について、6項目から1つを選択するように求めた。</p> <p>②教育内容、教育環境、大学教員、学生生活、成果等について質問項目を設定し、4件法で回答を求めた。</p> <p>③鳴門教育大学に対する要望等を自由記述で尋ねた。</p>													
(5)実施機関	総務委員会													
(6)分析機関	教育等に関するアンケート分析専門部会（教務委員会設置）													

分析の総括

	学士課程	修士課程	専門職学位課程
総括	<p>今年度（令和4年度）の学士課程については他の課程と同様であるが、これまでは前年度だけが比較対象とされていたのが、今年度より過去5年間の回答データ（グラフ）と比較して分析することとなった。ただし回答率がH30(25%)、R1(53%)、R2(40%)、R3(10%)、R4(65%)と低迷している上に増減が激しいため、設問によってはR3を除外したり、比較的回答率の高かったR1、R2とR4（今年度）と比較したりしている。</p> <p>なお、回答率が極端に悪かった令和3年度の反省から様々な工夫により令和4年度は過去5年間で最高の回答率となっている。とはいえ今後さらに回答率を高められるよう努力が必要である。</p> <p>『10.自由記述（18ページ以降）』の回答において具体的に指摘された点については、大学の立地条件などどうしようもない所もあるが、できるかぎり改善につなげる必要がある。</p>	<p>今年度（令和4年度）の修士課程については他の課程と同様であるが、これまでは前年度だけが比較対象とされていたのが、今年度より過去5年間の回答データ（グラフ）と比較して分析することとなった。ただし回答率がH30(28%)、R1(35%)、R2(39%)、R3(18%)、R4(42%)と低迷傾向にあり、とくにR3の回答率は全体の2割を切っていた。そのため設問によってはR3を除外したり、比較的回答率の高かったR1、R2とR4（今年度）と比較したりしている。</p> <p>増減の傾向は学士課程や専門職学位課程と似通っているため、全学的なアンケートの実施時期や方法が影響しているものと推測される。なお令和4年度は過去5年間で最高の回答率となっていることは朗報である。とはいえ今後さらに回答率を高められるよう努力が必要である。</p> <p>『10.自由記述（18ページ以降）』の回答において具体的に指摘された点については、大学の立地条件などどうしようもない所もあるが、できるかぎり改善につなげる必要がある。</p>	<p>今年度（令和4年度）の専門職学位課程については他の課程と同様であるが、これまでは前年度だけが比較対象とされていたのが、今年度より過去5年間の回答データ（グラフ）と比較して分析することとなった。ただし回答率がH30(28%)、R1(31%)、R2(40%)、R3(28%)、R4(51%)と低迷しているため、設問によっては比較的回答率の高かったR1、R2とR4（今年度）と比較したりしている。</p> <p>修士課程と比較すると専門職学位課程では「3研究動機（4ページ）」における「研究者となることを希望しているため」（R4：0%）、「9修了後の進路予定（17ページ）」における「進学」（R4：2%）と極端に低いことが注目される。これについては現在の教職系・教科系の専門職学位課程と以前の修士課程とを比較する必要があるのではないかと。</p> <p>『10.自由記述（18ページ以降）』の回答において具体的に指摘された点については、大学の立地条件などどうしようもない所もあるが、できるかぎり改善につなげる必要がある。</p>

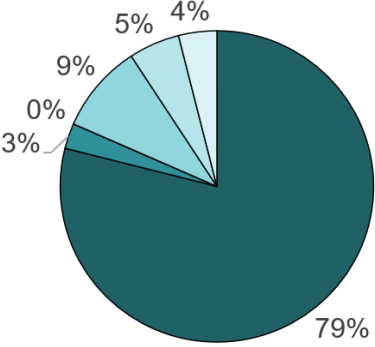
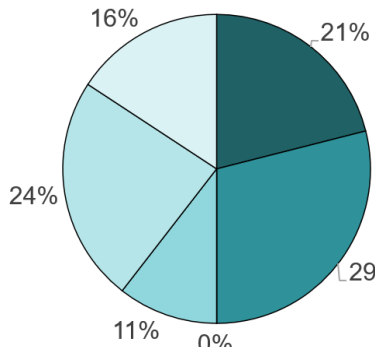
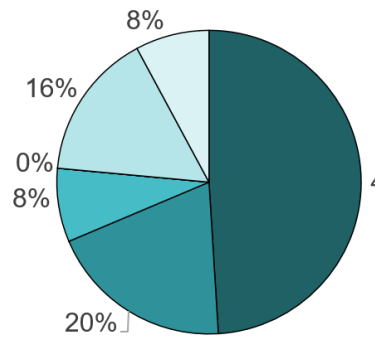
1. 所属専修・コース名

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
所属専修・コース名	回答	<ul style="list-style-type: none"> ■ 幼児教育専修 ■ 小学校教育専修 ■ 中学校教育専修 ■ 特別支援教育専修 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 心理臨床コース ■ 現代教育課題総合コース ■ グローバル教育コース 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 言語・社会系教科実践高度化コース ■ 自然・生活系教科実践高度化コース ■ 芸術・体育系教科実践高度化コース ■ 子ども発達支援コース ■ 学校づくりマネジメントコース ■ 生徒指導コース ■ 学習指導力開発コース ■ 教員養成特別コース
分析		<p>小学校教育専修(56%)が最も多かった。次に、中学校教育専修(38%)、幼児教育専修と特別支援教育専修(それぞれ3%)の順に多かった。</p>	<p>アンケート対象者数の内訳は心理臨床コース47名(51%)、現代教育課題総合コース17名(19%)、グローバル教育コース27名(30%)であった。</p> <p>それに対して、アンケートの回答37件(回答率41%)の内訳は、心理臨床コース10件(26%)、グローバル教育コース28件(74%)であった。</p> <p>前回(令和3年度)アンケート回答16件(回答率18%)と比較すると、回答率が大幅に上昇した。</p>	<p>この設問は専門職学位課程では今回の分析が初めてである。グラフを見て当然湧く疑問は、回答件数のコース別割合が、はたして実際の修了生のコース別人数の割合と果たして一致するのだろうかである。そこで令和4年度の修了生のコース別の人数と比べてみた。(割合は四捨五入)</p> <p>【修了生全体の内訳】 言語・社会系20(22%)、自然・生活系20(22%)、芸術・体育系9(10%)、子ども発達9(10%)、学校づくり11(12%)、生徒指導5(5%)、学習指導力3(3%)、教員養成特別16(17%)</p> <p>【回答(51件)の内訳】 言語・社会系11(22%)、自然・生活系15(29%)、芸術・体育系9(18%)、子ども発達9(18%)、学校づくり5(10%)、生徒指導1(2%)、学習指導力1(2%)、教員養成特別0(0%)</p> <p>令和3年度のアンケートの全回答者数(28名、回答率25%)からは劇的に改善したとはいえ、上記の数字の比較を見ると回答者の確保にはさらなる改善の余地が残されていると言える。</p>

2. 入学前の状況

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
入学前の状況	回答	設問なし		
分析		設問なし		
		<p>最も高い「他大学の学部生・研究生」(34%)：5年間を通して常に30%~40%台である。</p> <p>最も低い「徳島県内の現職教員」(5%)：R2まで10%台であったのに対し、R3(6%)、R4(5%)と減少傾向である。</p> <p>「その他」(32%)：R1~R3までは10%台であったのに対し、今年度は大幅に伸びた。</p> <p>「本学の学部生・研究生」(18%)：R3(6%)、R2(13%)と年度によって大きな差がある。</p> <p>「他大学の学部生・研究生」(47%)：H30~R1(10%台)、R2(35%)、R3(39%)と増加傾向にある。</p> <p>「徳島県内の現職教員」(22%)：H30(50%)、R1(58%)、R2(33%)、R3(25%)、R4(22%)と激減している。</p> <p>「徳島県外の現職教員」(6%)：H30(32%)、R1(19%)、R2(28%)、R3(29%)だったが激減している。</p> <p>この5年間でははっきりと見て取れるのは、学卒生と現職教員の割合の変化である。</p> <p>「学部生・研究生」(本学+他大学)を足した割合が、H30(18%)からR4(71%)と一貫して増加している一方で、「現職教員」(徳島県内+徳島県外)はH30(82%)からR4(28%)へと一貫して減少し、逆転してしまっている。</p>		

3. 入学動機

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
入学動機	回答	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 将来、教員になることを希望していたため ■ 2. 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため ■ 3. 立地・通学条件がよい ■ 4. 自身の学力に相応した大学であったため ■ 5. 本学進学を勧められたため □ その他 	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため ■ 2. 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため ■ 3. 教育委員会からの推薦があったため ■ 4. 研究者となることを希望しているため ■ 5. 本学大学院進学を勧められたため □ その他 	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため ■ 2. 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため ■ 3. 教育委員会からの推薦があったため ■ 4. 研究者となることを希望していたため ■ 5. 本学大学院進学を勧められたため □ その他
分析		<p>最も多いのは「将来、教員になることを希望していたため」(79%)。この回答については、R2(一昨年度)が66%、R1が72%であることを考えると、本年度はやや増加したといえる(R3はサンプル数が少ないため分析から除外。以下の項目でも同様)。</p> <p>2番目に多い回答(「その他」を除く)は「自身の学力に相応した大学であったため」(9%)であり、R2(11%)に比べるとやや低下した。</p>	<p>最も多いのは、「本学指導教員や授業科目に魅力があったため」(29%)。過去5年間(H30~R4)を通じて常に約30%以上を維持している。本学修士課程の指導教員の魅力や授業科目の良さが周知されてきたと推察される。</p> <p>また、「研究者となることを希望していたため」(24%)は、R2(15%)、R3(12%)から大幅に上昇した。将来的に研究者を目指す学生が増加したことも特徴的であるといえる。</p> <p>「教育委員会からの推薦があったため」は、R3(0%)に引き続き0%であった。</p>	<p>入学動機については、本来複数回答が予想される設問である。そのような設問にあって回答1「自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため」の回答データに有効性があるかは疑問である。</p> <p>「その他」(4名:8%)に添えられた記述:「(教員)免許取得のため」(2名)、「子どもを保育園に送る時間のゆとりが欲しかったため」(1名、残る1名は無回答)と、グラフには現れていない動機が見えてくる。教員免許の取得あるいは教採合格は、本学入学の主要な動機となるに十分であろう。また「時間のゆとり」というのも表立っては言えないかもしれないが、学校教員のライフサイクルにあって大学院を選択する十分な動機となりえる。</p> <p>なお、H30~R4の5年間を通じて「研究者となることを希望していたため」(R4:0%)と答えたのはR3の2名のみであった。「入学前の状況」の設問で明らかになった現職教員の割合の減少は、「時間のゆとり」や「研究者となること」といった、かつての修士課程には存在していた(かもしれない)魅力が薄れてしまったためかもしれない。</p>

4. 教育内容の質・量等

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
(1) 受講した講義全体	回答	<p>Q3-1-1 講義の内容のレベル: 29% (高い), 54% (どちらかといえば高い), 13% (どちらかといえば低い), 4% (低い)</p> <p>Q3-1-2 講義の内容の理解: 33% (1 高い), 57% (2 分かり易い), 11% (3 多い)</p> <p>Q3-1-3 必修とされる講義の時間数: 22% (1 高い), 58% (2 分かり易い), 18% (3 多い)</p>	<p>Q4-1-1 講義内容レベル: 39% (高い), 50% (どちらかといえば高い), 11% (どちらかといえば低い), 0% (低い)</p> <p>Q4-1-2 講義内容理解: 49% (1 高い), 49% (2 分かり易い), 3% (3 多い)</p> <p>Q4-1-3 必修講義の時間数: 13% (1 高い), 47% (2 分かり易い), 34% (3 多い), 5% (3 少ない)</p>	<p>Q4-1-1 講義の内容のレベル: 27% (高い), 65% (どちらかといえば高い), 8% (どちらかといえば低い), 0% (低い)</p> <p>Q4-1-2 講義の内容の理解: 33% (1 高い), 57% (2 分かり易い), 8% (3 多い)</p> <p>Q4-1-3 必修とされる講義の時間数: 10% (1 高い), 52% (2 分かり易い), 38% (3 多い), 0% (3 少ない)</p>
	分析	<p>Q3-1-1「講義の内容のレベル」：「高い」(29%)と「どちらかといえば高い」(54%)をあわせた割合(83%)は、R2(81%)、R1(70%)に比べると上昇傾向であった。</p> <p>Q3-1-2「講義の内容の理解」：「分かり易い」(33%)と「どちらかといえば分かり易い」(57%)を合わせた肯定的な回答割合(90%)は、R2(77%)、R1(76%)に比べると上昇傾向である。これらの結果から、本調査年度における講義は、これまでに比べて学生の実態に合った講義内容だったことが示唆される。これらは、コロナ禍で対面とオンラインのハイブリッド講義が実施される中で、教員側の創意工夫が行われた結果であることが示唆され、今後も更なる講義内容の向上が望まれる。</p> <p>Q3-1-3「必修とされる講義の時間数」：「多い」(22%)と「どちらかといえば多い」(58%)を合わせた肯定的な回答割合(80%)は、R2(80%)と同程度であったが、R1(58%)に比べると大幅に増加していた。これは、コロナ禍のオンライン講義の増加が影響したものと考えられる。このため、引き続き状況を追う必要がある。</p>	<p>Q4-1-1「講義内容レベル」：「高い」(39%)と「どちらかといえば高い」(50%)をあわせた肯定的な回答の割合(89%)は、令和3年度の結果(100%)から減少しているものの、高い値を維持しているといえる。</p> <p>Q4-1-2「講義内容理解」：「分かり易い」(49%)と「どちらかといえば分かり易い」(49%)を合わせた肯定的な回答割合(98%)は、R3(81%)、R2(98%)、R1(95%)と経年で見ても常に高い値を維持している。コロナ禍で対面とオンラインのハイブリッド講義が実施されたが、教員及び学生の努力と創意工夫の結果といえるだろう。</p> <p>Q4-1-3「必修講義の時間数」：「多い」(13%)と「どちらかといえば多い」(47%)を合わせた肯定的な回答の割合(60%)は、R3(69%)、R2(64%)と経年で見ても常に60%台で大きな変化はない。コロナが明け、オンライン授業から対面授業に移行しており、状況を注視する必要がある。</p>	<p>Q2(入学前の状況)の結果を見ると、今年度の回答の多数派は学卒院生であり、これまでの調査で多数派であった現職院生の時とその傾向が異なることが予測される。</p> <p>Q4-1-1「講義の内容のレベル」：「高い」という回答が27%で、昨年度より高くなっているが、経年比較で見ると低い。</p> <p>Q4-1-2「講義の内容の理解」：ほぼ例年通りの結果となっている。</p> <p>Q4-1-3「必修とされる講義の時間数」：「多い」という回答が10%で、この5年で最も高くなっている。学卒院生の回答者が多くなったことが影響している可能性があり、次年度以降、注視する必要がある。</p>

4. 教育内容の質・量等

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
(2) 受講した実習・演習全体	回答	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q3-2-1 実習・演習の内容のレベル: 47% (High), 45% (Somewhat High), 5% (Low)</p> <p>Q3-2-2 実習・演習の内容の理解: 41% (Easy), 50% (Somewhat Easy), 8% (Difficult)</p> <p>Q3-2-3 必修とされている実習・演習の時間数: 22% (Many), 53% (Somewhat Many), 24% (Few)</p> <p>Legend: 1. 高い, 2. 分かり易い, 3. 多い, 1. どちらかといえば, 2. 分かりやすい, 3. 多い, 1. 低い, 2. 分かりにくい, 3. 少ない</p>	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q4-2-1 実習・演習の内容のレベル: 30% (High), 59% (Somewhat High), 11% (Low), 0% (Very Low)</p> <p>Q4-2-2 実習・演習の内容の理解: 32% (Easy), 54% (Somewhat Easy), 14% (Difficult), 0% (Very Difficult)</p> <p>Q4-2-3 必修とされる実習・演習の時間数: 22% (Many), 51% (Somewhat Many), 22% (Few), 5% (Very Few)</p> <p>Legend: 1. 高い, 2. 分かり易い, 3. 多い, 1. どちらかといえば, 2. 分かりやすい, 3. 多い, 1. 低い, 2. 分かりにくい, 3. 少ない</p>	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q4-2-1 実習の在り方: 39% (Appropriate), 47% (Somewhat Appropriate), 10% (Inappropriate), 4% (Very Inappropriate)</p> <p>Q4-2-2 実習の目的・意義の理解: 43% (Understood), 45% (Somewhat Understood), 10% (Did not understand), 2% (Very did not understand)</p> <p>Q4-2-3 実習の時間数: 16% (Many), 71% (Somewhat Many), 12% (Few), 0% (Very Few)</p> <p>Legend: 1. 高い, 2. 理解できた, 3. 多い, 1. どちらかといえば, 2. 理解できた, 3. 多い, 1. どちらかといえば, 2. 理解できなかった, 3. 少ない, 1. 妥当ではない, 2. 理解できなかった, 3. 少ない</p>
	分析	<p>Q3-2-1「実習・演習の内容のレベル」：「高い」(47%)と「どちらかといえば高い」(45%)を合わせた肯定的な回答割合(92%)は、R2(88%)同様に約90%を占める。</p> <p>Q3-2-2「実習・演習の内容の理解」：「分かり易い」(41%)と「どちらかといえば分かり易い」(50%)を合わせた肯定的な回答割合(91%)は、R2(84%)と比較しても更に高い水準に上昇していることから、実習・演習のレベルは学生に適合していることが示唆された。</p> <p>Q3-2-3「必修とされている実習・演習の時間数」：「多い」(22%)と「どちらかといえば多い」(53%)を合わせた回答割合(75%)は、R2(75%)と同程度であった。</p>	<p>Q4-2-1「実習・演習の内容のレベル」：「高い」(30%)と「どちらかといえば高い」(59%)を合わせた肯定的な回答割合(89%)は、R3(75%)から大幅に上昇し、R2(85%)と同等の割合となった。</p> <p>Q4-2-2「実習・演習の内容の理解」：「分かり易い」(32%)と「どちらかといえば分かり易い」(54%)を合わせた肯定的な回答割合(86%)は、R3(88%)と同等である。</p> <p>Q4-2-3「必修とされる実習・演習の時間数」：「多い」(22%)と「どちらかといえば多い」(51%)を合わせた回答割合(73%)は、R3(56%)から大幅に上昇し、R2(76%)と同程度である。コロナ禍が明け、多くの実習・演習が対面で通常通り行われるようになってきたことが、大幅な上昇の理由であることが推察される。</p>	<p>Q4-2-1「実習の在り方」：「妥当である」(39%)の割合は、R3(前年度)に比べ、改善の傾向が見られる。</p> <p>Q4-2-2「実習の目的・意義の理解」：昨年度より低下している。新型コロナウイルス感染の影響が低減し、当初予定通りの実習が行われた状況を考えて、院生への説明を丁寧に実施するとともに、実習内容の改善も検討する必要がある。</p> <p>Q4-2-3「実習の時間数」：「多い」(16%)「どちらかといえば多い」(71%)を合わせて90%近い回答がある。専門職学位課程の中心は実習であるが、そこに負担を感じているものの割合が高いことが推察される。</p>

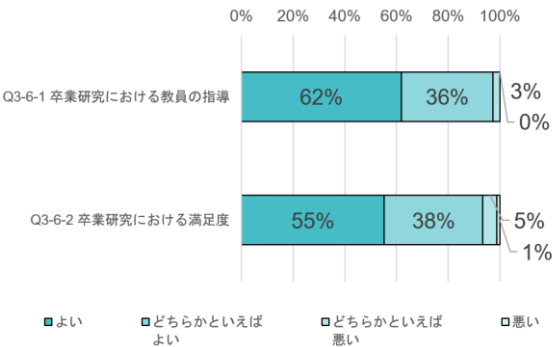
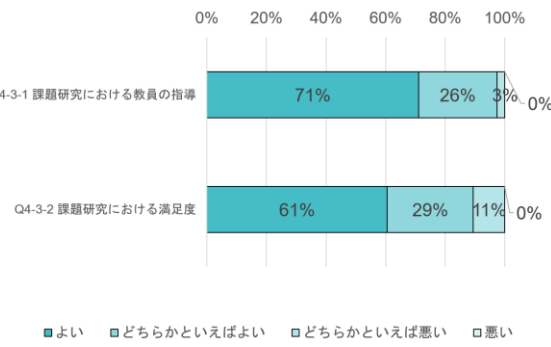
4. 教育内容の質・量等

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
(3) 教育実習全体・実習指導	回答	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q3-3-1 教育実習の内容のレベル 50% 43% 5% 1%</p> <p>Q3-3-2 教育実習の内容の理解 46% 42% 9% 3%</p> <p>Q3-3-3 必修とされる教育実習の時間数 24% 60% 16% 0%</p> <p>■ 1 高い □ どちらかといえば □ どちらかといえば □ 1 低い 2 分かり易い 1 高い 1 低い 2 分かりにくい 3 多い 2 分かり易い 2 分かりにくい 3 少ない 3 多い 3 少ない</p>	設問なし	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q4-3-1 大学院における指導担当教員の指導 60% 34% 2% 4%</p> <p>Q4-3-2 実習指導の満足度 53% 43% 4% 0%</p> <p>■ よい □ どちらかといえばよい □ どちらかといえば悪い □ 悪い</p>
	分析	<p>Q3-3-1「教育実習の内容のレベル」：「高い」(50%)と「どちらかといえば高い」(43%)を合わせた割合(93%)は、R2(96%)と比べるとやや低下した。「高い」のみの割合に注目しても、R2(64%)と比べると低下している。</p> <p>Q3-3-2「教育実習の内容の理解」：「分かり易い」(46%)と「どちらかといえば分かり易い」(42%)を合わせた肯定的な回答割合は、R2(89%)から大きな変化はなかった。</p> <p>Q3-3-3「必修とされる教育実習の時間数」：「多い」(24%)と「どちらかといえば多い」(60%)を合わせた割合(84%)は、R2(79%)と比べると、やや増加した。</p>		設問なし

4. 教育内容の質・量等

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
(4) 教育実践コア 科目について	回答	<p>Q3-4-1 教育実践コア科目は、教師として必要な実践的指導力を身につけるのに役立ちましたか</p> <p>■役に立った ■どちらかといえば役に立った ■どちらかといえば役に立たなかった ■役に立たなかった</p>	設問なし	設問なし
	分析	<p>Q3-4-1「教育実践コア科目は、教師として必要な実践的指導力を身につけるのに役立ちましたか」：「役に立った」(37%)と「どちらかといえば役に立った」(51%)を合わせた肯定的な回答割合(88%)は、R2(73%)、R1(79%)より向上した。</p>	設問なし	設問なし
(5) 教職実践演習	回答	<p>Q3-5-1最終学年に履修した教職実践演習は自らが修得してきた知識・技能を補完・向上させ、教員として必要な資質・能力として有機的に統合・形成されるのに役立ちましたか</p> <p>■役に立った ■どちらかといえば役に立った ■どちらかといえば役に立たなかった ■役に立たなかった</p>	設問なし	設問なし
	分析	<p>Q3-5-1「教職実践演習は教員として必要な資質・能力として有機的に統合・形成されるのに役立ちましたか」：「役に立った」(41%)と「どちらかといえば役に立った」(53%)を合わせた肯定的な回答割合(94%)は、R2(80%)、R1(73%)より向上した。</p>	設問なし	設問なし

4. 教育内容の質・量等

アンケート項目	学士課程	修士課程	専門職学位課程																																								
(6) 卒業研究 課題研究	<p>回答</p>  <p>Q3-6-1 卒業研究における教員の指導</p> <table border="1"> <tr> <th>評価</th> <th>割合</th> </tr> <tr> <td>よい</td> <td>62%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえばよい</td> <td>36%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえば悪い</td> <td>3%</td> </tr> <tr> <td>悪い</td> <td>0%</td> </tr> </table> <p>Q3-6-2 卒業研究における満足度</p> <table border="1"> <tr> <th>評価</th> <th>割合</th> </tr> <tr> <td>よい</td> <td>55%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえばよい</td> <td>38%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえば悪い</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>悪い</td> <td>1%</td> </tr> </table>	評価	割合	よい	62%	どちらかといえばよい	36%	どちらかといえば悪い	3%	悪い	0%	評価	割合	よい	55%	どちらかといえばよい	38%	どちらかといえば悪い	5%	悪い	1%	 <p>Q4-3-1 課題研究における教員の指導</p> <table border="1"> <tr> <th>評価</th> <th>割合</th> </tr> <tr> <td>よい</td> <td>71%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえばよい</td> <td>26%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえば悪い</td> <td>3%</td> </tr> <tr> <td>悪い</td> <td>0%</td> </tr> </table> <p>Q4-3-2 課題研究における満足度</p> <table border="1"> <tr> <th>評価</th> <th>割合</th> </tr> <tr> <td>よい</td> <td>61%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえばよい</td> <td>29%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえば悪い</td> <td>11%</td> </tr> <tr> <td>悪い</td> <td>0%</td> </tr> </table>	評価	割合	よい	71%	どちらかといえばよい	26%	どちらかといえば悪い	3%	悪い	0%	評価	割合	よい	61%	どちらかといえばよい	29%	どちらかといえば悪い	11%	悪い	0%	<p>設問なし</p>
評価	割合																																										
よい	62%																																										
どちらかといえばよい	36%																																										
どちらかといえば悪い	3%																																										
悪い	0%																																										
評価	割合																																										
よい	55%																																										
どちらかといえばよい	38%																																										
どちらかといえば悪い	5%																																										
悪い	1%																																										
評価	割合																																										
よい	71%																																										
どちらかといえばよい	26%																																										
どちらかといえば悪い	3%																																										
悪い	0%																																										
評価	割合																																										
よい	61%																																										
どちらかといえばよい	29%																																										
どちらかといえば悪い	11%																																										
悪い	0%																																										
分析	<p>Q3-6-1「卒業研究における教員の指導」：「よい」(62%)と「どちらかといえばよい」(36%)を合わせた肯定的な回答割合(98%)は、R2(97%)、R1(93%)と変わらず高水準である。 しかし、特に肯定的に捉えている「よい」がR2、R1よりも約10ポイント低下している点は課題であり、より高水準の卒業研究の指導が望まれる。</p> <p>Q3-6-2「卒業研究における満足度」：「よい」(55%)と「どちらかといえばよい」(38%)を合わせた肯定的な回答割合(93%)は、非常に高水準ではあるものの、R2(肯定的な回答100%)と比較すると、否定的回答をした学生が増加しているという意味では課題が残る。</p>	<p>Q4-3-1「課題研究における教員の指導」：「よい」(71%)と「どちらかといえばよい」(26%)を合わせた肯定的な回答割合(97%)は、R3(81%)から大幅に上昇し、R2(94%)と同水準であった。 理由として、コロナ禍が明け、対面での指導が可能になったことが考えられる。</p> <p>Q4-3-2「課題研究における満足度」：「よい」(61%)と「どちらかといえばよい」(29%)を合わせた肯定的な回答割合(90%)は、R3(81%)から上昇し、R2(90%)と同等の割合となった。他方で「どちらかといえば悪い」11%の学生が否定的に捉えていることは課題である。</p>	<p>設問なし</p>																																								

5. 教育環境

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
教育環境	回答	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q4-1 講義室・体育館等の施設 46% 34% 14% 5%</p> <p>Q4-2 椅子・机・PC等の学習機材の設備 38% 42% 14% 5%</p> <p>Q4-3 図書館の蔵書・環境 40% 44% 13% 3%</p> <p>Q4-4 大学内におけるゼミ等個別的学习環境 41% 41% 15% 3%</p> <p>Q4-5 学生支援のための事務対応について 41% 42% 9% 8%</p> <p>Q4-6 大学が企画・主催する行事の質（例：合宿研修、就職ガイダンス、教採対策等） 43% 38% 12% 7%</p> <p>Q4-7 大学が企画・主催する行事の時期及び期間 41% 44% 9% 5%</p> <p>Q4-8 大学全体における学習環境 46% 39% 11% 4%</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q5-1 講義室・体育館等の施設 29% 45% 21% 5%</p> <p>Q5-2 椅子・机・PC等の学習機材の設備 47% 37% 8% 8%</p> <p>Q5-3 図書館の蔵書・環境 37% 45% 11% 8%</p> <p>Q5-4 大学内におけるゼミ室等個別的学习環境 47% 29% 11% 13%</p> <p>Q5-5 事務窓口の対応 43% 30% 19% 8%</p> <p>Q5-6 大学が企画・主催する行事の質 37% 42% 13% 8%</p> <p>Q5-7 大学が企画・主催する行事の時期及び期間 41% 49% 5% 5%</p> <p>Q5-8 大学全体における学習環境 42% 42% 8% 8%</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q5-1 講義室・体育館等の施設 30% 56% 12% 2%</p> <p>Q5-2 椅子・机・PC等の学習機材の設備 27% 49% 20% 4%</p> <p>Q5-3 図書館の蔵書・環境 41% 43% 16% 0%</p> <p>Q5-4 大学内におけるゼミ室等個別的学习環境 46% 44% 10% 0%</p> <p>Q5-5 事務窓口の対応 33% 29% 16% 22%</p> <p>Q5-6 大学が企画・主催する行事の質 24% 51% 18% 8%</p> <p>Q5-7 大学が企画・主催する行事の時期及び期間 20% 57% 22% 0%</p> <p>Q5-8 大学全体における学習環境 25% 59% 16% 0%</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>
分析		<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見として整理（括弧内：R2、R1）すると、以下の通りとなる。</p> <p>Q4-1「講義室・体育館等の施設」80%（77%、64%） Q4-2「学習機材の設備」80%（86%、64%） Q4-3「図書館の蔵書・環境」84%（89%、70%） Q4-4「ゼミ等個別的学习環境」82%（78%、51%） Q4-5「学生支援のための事務対応」83%（84%、51%） Q4-6「行事の質」81%（78%、74%） Q4-7「行事の時期及び期間」85%（91%、74%） Q4-8「大学全体における学習環境」85%（80%、76%）</p> <p>本年度は、全体として肯定的な意見が80%以上と多いことは評価できる。理由は不明であるが、コロナ禍以前のR1に比べると、すべての項目で肯定的意見が上昇している。否定的意見がより少なくなるよう、改善が求められる。特に、「事務対応」と「行事の質」で「悪い」が相対的に多いため、自由意見等も踏まえつつ、改善に当たる必要がある。</p> <p>最終学年がコロナ禍となったR2に比べると、「学習機材の設備」「図書館の蔵書・環境」「行事の時期及び期間」がやや低下している。これらは誤差の範囲内であるため、今後も継続的に分析していく必要がある。</p>	<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見として整理（括弧内：R2、R1）すると、以下の通りとなる。</p> <p>Q5-1「講義室・体育館等の施設」74%（63%、78%） Q5-2「学習機材の設備」84%（75%、77%） Q5-3「図書館の蔵書・環境」82%（75%、81%） Q5-4「ゼミ等個別的学习環境」73%（69%、78%） Q5-5「学生支援のための事務対応」83%（56%、66%） Q5-6「行事の質」79%（62%、87%） Q5-7「行事の時期及び期間」90%（69%、90%） Q5-8「大学全体における学習環境」84%（75%、90%）</p> <p>本年度は、すべての質問においてR2を上回り、R1と同等の割合となった。特に、否定的意見がより少なくなるよう、改善が求められる。特に、「事務対応」、昨年、一昨年と比較して大幅に上昇しており、改善がなされたといえる。他方で、「ゼミ等個別的学习環境」と「講義室・体育館等の施設」が昨年度から上昇したといえ、70%台にとどまっている。自由記述において、グローバル教育コースの在籍人数と院生室のスペースがわりにおいておらず、全員が勉強できるスペースがなく同じ学費を払っているにも関わらず不公平であるとの記載があった。今後検討の必要があるだろう。</p>	<p>全体として、「よい」・「どちらかといえばよい」を合わせた割合は80%前後あり、総体として良い評価を得ている。</p> <p>例年に比べ、事務対応に対する否定的な回答の割合が高い。自由記述の回答も踏まえ、対応を検討する必要がある。</p>

6. 大学教員

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
大学教員について	回答	<p>Q5-1 大学教員の教授・指導力: 61% (よい), 34% (どちらかといえばよい), 4% (どちらかといえば悪い), 1% (悪い)</p> <p>Q5-2 大学教員の人間的・教育的愛情: 65% (よい), 33% (どちらかといえばよい), 0% (どちらかといえば悪い), 1% (悪い)</p>	<p>Q6-1 大学教員の教授・研究・指導力: 63% (よい), 34% (どちらかといえばよい), 3% (どちらかといえば悪い), 0% (悪い)</p> <p>Q6-2 大学教員の人間的・教育的愛情: 65% (よい), 27% (どちらかといえばよい), 8% (どちらかといえば悪い), 0% (悪い)</p>	<p>Q6-1 大学教員の教授・研究・指導力: 47% (よい), 51% (どちらかといえばよい), 2% (どちらかといえば悪い), 0% (悪い)</p> <p>Q6-2 大学教員の人間的・教育的愛情: 65% (よい), 27% (どちらかといえばよい), 8% (どちらかといえば悪い), 0% (悪い)</p>
分析		<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見、「悪い」「どちらかといえば悪い」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>Q5-1「大学教員の教授・指導力」 : 95% (R3 : 100%) の学生が肯定的、</p> <p>Q5-2「大学教員の人間的・教育的愛情」 : 98% (R3 : 100%) の学生が肯定的であることから、大学教員に対する満足度は、前年度 (R3) と同等に高いといえる。</p> <p>特に、「よい」という意見に着目すると、どちらの質問項目でも、H30～R3に比べて高く60%を超えた。数値の上昇がどのような理由によるかは特定することができないが、良い傾向である。</p>	<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見、「悪い」「どちらかといえば悪い」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>Q6-1「大学教員の教授・指導力」 : 97% (R3 : 88%) の学生が肯定的と捉えている。</p> <p>Q6-2「大学教員の人間的・教育的愛情」 : 92% (R3 : 88%) が肯定的であることから、大学教員に対する満足度は、前年度 (R3) 以上に高いといえる。</p>	<p>Q6-1「大学教員の教授・指導力」 Q6-2「大学教員の人間的・教育的愛情」 両項目共に極めて高い水準にあり、経年比較を見ても、その傾向は大きく変化がない。 少人数指導の下、質の高い関わりが保証されている点は、今後も継続していくことが望ましい。</p>

7. 学生生活

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
学生生活	回答	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q6-1 修学支援</p> <p>Q6-2 卒業後に向けた就職・進学支援</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q7-1 修学支援</p> <p>Q7-2 修了後に向けた就職・進学・復職支援</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>	<p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>Q7-1 修学支援</p> <p>Q7-2 修了後に向けた就職・進学・復職支援</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>
分析	<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見、「悪い」「どちらかといえば悪い」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>Q6-1「修学支援」：89%（R3：82%）の学生が肯定的。肯定的意見は例年80%台前半だったものが本年度（R4）は微増している。特に「よい」と回答した学生はH30、R1、R3は30%までであったものが、本年度はR2と同等の43%であった。</p> <p>Q6-2「卒業後に向けた就職・進学支援」：91%（R3：54%）の学生が肯定的であった。R3は肯定的意見が下がったものの、本年度はH30～R2の水準と同等であり、「どちらかといえばよい」の回答が増えた分、それらの水準をやや超える結果となった。就職・進学支援に携わる教職員の活動の成果が現れた結果と思われる。</p>	<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見、「悪い」「どちらかといえば悪い」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>Q7-1「修学支援」：84%（R3：86%）の学生が肯定的であった。過去5年間の経年で比較してもその傾向は変わらない。</p> <p>Q7-2「卒業後に向けた就職・進学支援」：65%（R3：81%）の学生が肯定的であった。過去5年間80%～90%台を維持していたのが、65%と大きく下がった。この理由について今後分析していく必要がある。</p>	<p>Q7-1「就学支援」 Q7-2「修了後に向けた就職・進学・復職支援」 について、経年比較で見ると、その傾向は変わらない。</p> <p>ただ、学士課程、修士課程の結果と比べると、満足度が低い結果となっている。従来、回答の中心が現職教員であったことから、これらの支援を直接必要と感じていなかったからかもしれないが、今年度は学卒院生の割合が高いことを考えると、学卒院生に対する就職支援のあり方について、現状を再分析することが求められる。</p>	

8. 本学で学んだことの成果

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
(1) 教育内容の理解度	回答	<p>Q7-1 教育内容の理解度</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>	<p>Q8-1 教育内容の理解度</p> <p>■よい ■どちらかといえばよい ■どちらかといえば悪い ■悪い</p>	<p>Q8-1 教育内容の満足度</p> <p>Q8-2 教育内容の理解</p> <p>Q8-3 教員としての資質能力の向上につながったか</p> <p>Q8-4 教育活動や学校運営の経験やスキルの向上</p> <p>■1 満足できるものであった 2 理解できた 3 つながった 4 習得できた ■どちらかといえば1 満足できるものであった 2 理解できた 3 つながった 4 習得できた ■どちらかといえば1 満足できるものではなかった 2 理解できなかった 3 つながらなかった 4 習得できなかった ■1 満足できるものではなかった 2 理解できなかった 3 つながらなかった 4 習得できなかった</p>
	分析	<p>「よい」「どちらかといえばよい」を肯定的意見、「悪い」「どちらかといえば悪い」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>Q7-1「教育内容の理解度」：肯定的な回答は95%（R3：91%）を占めており、ほとんどの学生が本学の教育内容を理解できたと捉えていることが示された。特に「よい」との回答がH30～R3では21～36%であったものが、47%と高くなっており、例年以上に評価されていることがわかる。</p>	<p>Q8-1「教育内容の理解度」：「よい」（55%）と「どちらかといえばよい」（39%）の回答を合わせた肯定的な回答割合は94%となっている。前年度R3（82%）から10%程度増加し、前々年度R2(93%)と同等の割合まで回復した。ほとんどの学生が本学の教育内容を理解できたと捉えていることが示された。</p>	<p>Q8-1「教育内容の満足度」：R2、R3の「満足できるものであった」という回答がやや低い結果となっている。教科系のコースの修了者が出るとともに、在籍する院生数が倍以上となったため、特に必修科目が100名を越すことも多くなり、満足度の低下につながった可能性がある。</p> <p>それ以外の項目では、経年変化で大きな違いはなかった。</p>

8. 本学で学んだことの成果

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程																																																																																																														
(2) 具体的な成果 (一般的資質)	回答	<table border="1"> <caption>学士課程 回答割合</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>身に付いた</th> <th>どちらかといえば身に付いた</th> <th>どちらかといえば身に付かなかった</th> <th>身に付いていない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1幅広く豊かな教養</td><td>41%</td><td>51%</td><td>8%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>2強い責任感</td><td>47%</td><td>48%</td><td>5%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>3コミュニケーション能力・折衝能力</td><td>46%</td><td>43%</td><td>11%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>4他者に対する人間的愛情</td><td>54%</td><td>38%</td><td>8%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>5創造性</td><td>43%</td><td>43%</td><td>13%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>6精神的強さ</td><td>47%</td><td>41%</td><td>12%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>7協調性</td><td>54%</td><td>37%</td><td>9%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>8社会規範・マナー</td><td>45%</td><td>48%</td><td>7%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>9リーダーシップ・実行力</td><td>42%</td><td>47%</td><td>11%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>10情報活用能力</td><td>41%</td><td>49%</td><td>9%</td><td>1%</td></tr> </tbody> </table>	項目	身に付いた	どちらかといえば身に付いた	どちらかといえば身に付かなかった	身に付いていない	1幅広く豊かな教養	41%	51%	8%	0%	2強い責任感	47%	48%	5%	0%	3コミュニケーション能力・折衝能力	46%	43%	11%	0%	4他者に対する人間的愛情	54%	38%	8%	0%	5創造性	43%	43%	13%	0%	6精神的強さ	47%	41%	12%	0%	7協調性	54%	37%	9%	0%	8社会規範・マナー	45%	48%	7%	0%	9リーダーシップ・実行力	42%	47%	11%	0%	10情報活用能力	41%	49%	9%	1%	<table border="1"> <caption>修士課程 回答割合</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>身に付いた</th> <th>どちらかといえば身に付いた</th> <th>どちらかといえば身に付かなかった</th> <th>身に付いていない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>幅広く豊かな教養</td><td>50%</td><td>42%</td><td>8%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>強い責任感</td><td>66%</td><td>26%</td><td>8%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>コミュニケーション能力・折衝能力</td><td>61%</td><td>34%</td><td>5%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>他者に対する人間的愛情</td><td>55%</td><td>34%</td><td>11%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>創造性</td><td>50%</td><td>39%</td><td>11%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>精神的強さ</td><td>55%</td><td>32%</td><td>13%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>協調性</td><td>61%</td><td>32%</td><td>8%</td><td>0%</td></tr> <tr><td>社会規範・マナー</td><td>55%</td><td>37%</td><td>5%</td><td>3%</td></tr> <tr><td>リーダーシップ・実行力</td><td>45%</td><td>42%</td><td>8%</td><td>5%</td></tr> <tr><td>情報活用能力</td><td>58%</td><td>34%</td><td>8%</td><td>0%</td></tr> </tbody> </table>	項目	身に付いた	どちらかといえば身に付いた	どちらかといえば身に付かなかった	身に付いていない	幅広く豊かな教養	50%	42%	8%	0%	強い責任感	66%	26%	8%	0%	コミュニケーション能力・折衝能力	61%	34%	5%	0%	他者に対する人間的愛情	55%	34%	11%	0%	創造性	50%	39%	11%	0%	精神的強さ	55%	32%	13%	0%	協調性	61%	32%	8%	0%	社会規範・マナー	55%	37%	5%	3%	リーダーシップ・実行力	45%	42%	8%	5%	情報活用能力	58%	34%	8%	0%	設問なし
	項目	身に付いた	どちらかといえば身に付いた	どちらかといえば身に付かなかった	身に付いていない																																																																																																													
1幅広く豊かな教養	41%	51%	8%	0%																																																																																																														
2強い責任感	47%	48%	5%	0%																																																																																																														
3コミュニケーション能力・折衝能力	46%	43%	11%	0%																																																																																																														
4他者に対する人間的愛情	54%	38%	8%	0%																																																																																																														
5創造性	43%	43%	13%	0%																																																																																																														
6精神的強さ	47%	41%	12%	0%																																																																																																														
7協調性	54%	37%	9%	0%																																																																																																														
8社会規範・マナー	45%	48%	7%	0%																																																																																																														
9リーダーシップ・実行力	42%	47%	11%	0%																																																																																																														
10情報活用能力	41%	49%	9%	1%																																																																																																														
項目	身に付いた	どちらかといえば身に付いた	どちらかといえば身に付かなかった	身に付いていない																																																																																																														
幅広く豊かな教養	50%	42%	8%	0%																																																																																																														
強い責任感	66%	26%	8%	0%																																																																																																														
コミュニケーション能力・折衝能力	61%	34%	5%	0%																																																																																																														
他者に対する人間的愛情	55%	34%	11%	0%																																																																																																														
創造性	50%	39%	11%	0%																																																																																																														
精神的強さ	55%	32%	13%	0%																																																																																																														
協調性	61%	32%	8%	0%																																																																																																														
社会規範・マナー	55%	37%	5%	3%																																																																																																														
リーダーシップ・実行力	45%	42%	8%	5%																																																																																																														
情報活用能力	58%	34%	8%	0%																																																																																																														
	分析	<p>「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を肯定的意見、「身に付いていない」「どちらかといえば身に付いていない」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>いずれの項目でも85%以上の学生が肯定的に評価している。この傾向はいずれの項目でも例年をやや上回る結果である。</p> <p>特に「1.幅広く豊かな教養」「4.他者に対する人間的愛情」「5.創造性」「9.リーダーシップ・実行力」「10.情報活用能力」では「身に付いた」と回答した学生の比率が高かった。</p> <p>他の質問項目も、例年同様あるいは例年に比べやや比率が高かった。</p> <p>今年度も、各資質が「身に付いた」と実感する学生が多いことが示された。</p>	<p>全10項目において「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を合わせた肯定的な回答割合が80%を超えている。</p> <p>その中でも「幅広く豊かな教養」「強い責任感」「コミュニケーション能力・折衝能力」「協調性」「社会規範・マナー」「情報活用能力」が90%を超えている。</p> <p>この傾向は過去5年とほぼ同様であり、今年度も、各資質を一定程度習得できたと実感する学生が多いことが示された。</p>	設問なし																																																																																																														

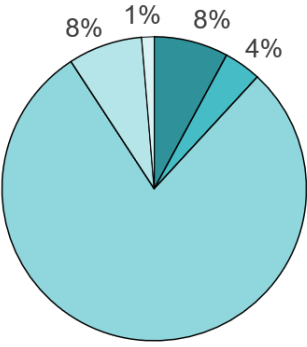
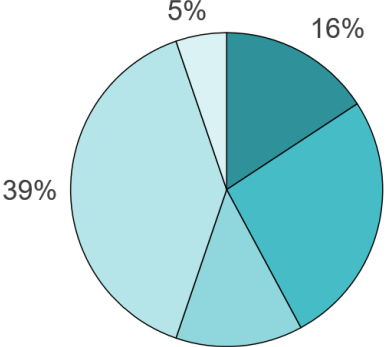
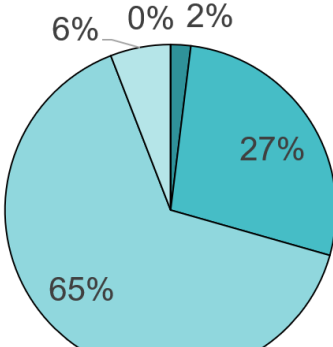
8. 本学で学んだことの成果

アンケート項目	学士課程	修士課程	専門職学位課程
<p>(2) 具体的な成果 (教育資質)</p> <p>回答</p>			<p>設問なし</p>
<p>分析</p>	<p>「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と肯定的に回答した学生は、 「1 授業方法能力」「2 教材研究開発能力」「3 専門領域における知識」では約95%（R3：約80～90%） 「4 学級経営能力」「5 生徒指導力」では約80%（R3：約40～55%）であった。 本年度は昨年度・例年（H30～R3）に比べて身に付いたと評価する学生が多かった。</p> <p>学士課程の学びだけでは習得しにくい能力ではあるが、それでも本年度は身に付いたとする学生が多いことは興味深い。</p>	<p>「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と肯定的な回答の割合が高い項目は、 「1 授業方法能力」（91%）、「2 教材研究開発能力」（96%）、「3 専門領域における知識」（96%）、「4 学級経営能力」（79%）、「5 生徒指導力」（80%）であった。</p> <p>すべての項目において前年度R3の割合を上回り、前々年度R2以前の割合に戻った。この原因は現時点で不明だが、昨年度の分析にもあるように、コロナ中・コロナ後において、これらの能力に関する捉え方が変化したことも考えられる。今後の推移を注視していくことが重要である。</p>	<p>設問なし</p>

8. 本学で学んだことの成果

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
(3) 教育内容	回答	<p>Q7-3 社会に出て、本学の教育内容が役立つか</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 思う ■ どちらかといえば思う ■ どちらかといえば思わない ■ 思わない</p>	<p>Q8-3 Q8-2の項目を総合的に判断して、社会に出て、本学の教育が役立つ(活かせる)と思われますか。</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 思う ■ どちらかといえば思う ■ どちらかといえば思わない ■ 思わない</p>	設問なし
	分析	<p>「思う」「どちらかといえば思う」を肯定的意見、「思わない」「どちらかといえば思わない」を否定的意見として各項目の結果を整理する。</p> <p>Q7-3「社会に出て本学の教育内容が役に立つか」：肯定的に回答した学生の割合は96%（R3：91%）と、例年をやや上回る結果であった。特に「思う」については、例年30%台であったものが59%と1.5～2倍にまで増えている。例年ほとんどの学生が本学で学んだことの有用性を実感できていることが示されてきたが、本年度は特にそうであったと言える。</p>	<p>Q8-3「社会に出て本学の教育内容が役に立つか」：「思う」「どちらかといえば思う」を合わせた肯定的な回答の割合は97%である。この項目は過去5年間常に80%以上であり、高い割合を維持している。特に今年度はR3(86%)から11%上昇した。例年ほとんどの学生が本学で学んだことの有用性を実感できていることが示されてきたが、本年度は特にそうであったといえる。</p>	設問なし

9. 卒業後・修了後の進路予定

アンケート項目		学士課程	修士課程	専門職学位課程
卒業後・修了後の進路予定	回答	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 本学大学院に進学（研究生等になることを含む） ■ 他大学大学院に進学（研究生等になることを含む） ■ 教員（正規・非正規問わず）として就職 ■ 教員以外の職に就職 □ その他 	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 進学(研究生等となることを含む) ■ 現職復帰 ■ 教員（正規・非正規問わず）として就職 ■ 教員以外の職に就職 □ その他 	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 進学 ■ 現職復帰 ■ 教員（正規・非正規問わず）として就職 ■ 教員以外の職に就職 □ その他
	分析	<p>「教員として就職」(79%)：昨年度（R3：55%）より増加し、過去5年のデータでは2番目の高い割合となった。R3は教員として就職する学生の割合が減少したが、R4は平均以上の割合となっており、R3の傾向はコロナ禍などを原因とする一過性のものであった可能性が高い。ただし今後も個々の学生の進路選択の自由と多様性を尊重しながら、進路実現への効果的な方策を今後も検討し続けることが重要である。</p> <p>「教員以外の就職」が 8%(R3：27%、R2：21%)、「大学院に進学」も12%(R3：0%、R2：14%)となった。</p>	<p>「進学」(16%)：過去2年(0%)から上昇した。 「現職復帰」(26%)：R3(50%)から減少している。 「教員以外の職に就職」(39%)：過去3年間30%～40%であり大きな変化はない。 本学の修士課程は教職だけでなく、臨床心理、学習科学、グローバル教育など様々な分野に力を入れており、修了生の進路も多様化している。</p>	<p>「現職復帰」(27%)：教職系のみで構成されていたR2(60%～85%)に対し、教科系の修了者が対象になったR3(50%)、そして今年度R4(27%)と減少している。このことは、これまでのアンケートの回答の中心が現職教員であったのが、今年度は学卒者が回答の中心となっていることを示している。この点は、結果の分析において、留意すべきであろう。</p>